

(平成18年1月11日発行)

# 会報

## 第12号

北海道高等学校世界史研究会

事務局 北海道当別高等学校

☎061-0296

石狩郡当別町字春日町84-4

☎(01332) 3-2444 / FAX(01332)3-2380

## 歴史は繰り返される

北海道高等学校世界史研究会

会長 戸出秀邦

(北海道芦別高等学校長)

一昨年、第86回全国高校野球選手権大会で駒沢大学付属苫小牧高等学校が、深紅の大優勝旗を初めて北の大地にもたらしてくれました。そして昨年の第87回大会での2連覇は、実に57年ぶり、史上6校目の快挙でした。「すごいことを北海道のチームがやってのけた。『夢の、夢の、夢のようです!』」というテレビ解説者の言葉も記憶に新しいですが、駒大苫小牧は、さらに新人戦、国体などでも優勝して、北に覇者あり、を示すとともに、道民に夢と希望・感動を与えてくれました。まさにひとつの歴史が繰り返されました。本当に良くやったとエールを送りたいと思います。

さて、今、学校教育に問われていることは、21世紀を生きる子どもたちが確かな学力を身につけ、感動と心のふれあいを体感できる豊かな心の育成を目指していくことだと思います。そのため、高校教育においては、基礎・基本の定着を図り、生徒一人ひとりがゆとりの中で生きる力を育み、個性や能力を伸ばすことが重要です。各学校において、私たち教師は、その職責を遂行するために、絶えず研究と修養に努め、多様化している生徒に対する指導に工夫を凝らし、魅力ある、特色ある学校づくりに取り組み、さらに学校・家庭・地域との協力や連携を大切にしているところだと思います。歴史学習を指導する上で、「確かな学力」を育成するためには、生徒の主體的な取り組みを促す授業の創造が大切です。また、基礎・基本的な知識に基づいて、歴史的思考力や判断力・表現力を育成することと、評価法の改善・充実が必要であると考えます。

第36回高世研の研究大会は、初めて全道高等学校日本史教育研究会との共催により、文部科学省特定領域研究主催で、公開シンポジウム「中世総合資料学と歴史教育～北方世界の交流と変容～」を開催できました。関係諸機関や関係者の皆様に厚く感謝とお礼を申し上げます。各分野の先生方が現地で調査・体験された貴重な資料に基づく講演や説明など、日頃歴史を教える教員が、教材として授業でも取り入れられることのできる質の高い中身の濃い内容で、2日間にわたり大変充実した有意義な研究会であったと思います。歴史教育に携わる教員の資質の向上を目的とした高世研の研究大会、また高教研の世界史分科会などは、世界史の教員として研鑽し合える場として大変意義のある場であると思います。今後とも諸先生方の一層のご研鑽とご健勝を祈念申し上げます。

---

## 第36回研究大会記録

日 時 平成17年8月4日(木)・5日(金)  
会 場 札幌学院大学 S G Uホール

昨年の第36回研究大会は、文部科学省特定領域研究「中世考古学の総合的研究－学融合を目指した新創世領域」主催で、北海道高等学校日本史教育研究会および札幌学院大学との共催によって、公開シンポジウム「中世総合資料学と歴史教育－北方世界の交流と変容－」として開催されました。

### 【8月4日】

第1セッション：環日本海北部の中世史料研究 司会 澤井 玄（北海学園大学）

1. 「アイヌ文化形成の諸問題」 天野哲也（北海道大学総合博物館）
  2. 「北東アジアの中世：靺鞨・渤海・女真の考古学研究」 白杵勲（札幌学院大学）
- 記念講演「サンタンとスメレンクルー19世紀の北方交易民」

佐々木史郎（国立民族学博物館教授）

3. 「史料から見た靺鞨・渤海・女真と日本列島」 養島栄紀（苫小牧駒沢大学）
4. 「金～明代の東北アジアと日本列島」 中村和之（函館工業高等専門学校）
5. 「モンゴル帝国時代の史料研究最前線」 村岡倫（龍谷大学）

### 【8月5日】

第2セッション：歴史教育の現場から－ロシア極東の歴史教科書を読む 司会 中村和之

1. 「日本の歴史教育から見た『サハリンの歴史』」 板橋政樹（ユーラシア協会北海道連合会）
2. 「世界史教育・歴史教育者育成の現場の立場から」 吉嶺茂樹（当別高等学校）
3. 「日本史教育の立場から」 長谷巖（札幌星園高等学校）

パネルディスカッション 司会 中村和之

発表者

コメンテーター 赤間幸人（北海道教育庁）

シンポジウム総括

北海道高等学校日本史教育研究会会長

北海道高等学校世界史研究会会長

---

## シンポジウムを振り返って

### 臼杵 勲（札幌学院大学）

2005年8月4・5日に開催した、公開シンポジウム「中世総合資料学と歴史教育～北方世界の交流と変容～」が無事終了してほっとしている。約200名の参加は大成功といってよい。ご協力いただいた皆様方にあらためてお礼申し上げたい。

このシンポジウムは私と中村和之先生（函館工業高等専門学校教授／元釧路湖陵高等学校教諭）も参加している文部科学省特定領域研究「中世考古学の総合的研究－学融合を目指した新領域創成」の主催として行われた。この研究には、考古学・文献史学以外に、自然科学・建築史学など多分野の研究者からなる20以上の研究班が参加しており、多面的に資料を研究する新しい研究分野を創成することを目的としている。そしてその中に、北方史に関連する研究班が4つ含まれている。近年は、研究者は研究だけしていればよいというご時世ではなく、特に助成研究では研究成果の公開と社会への還元が強く求められている。2005年度は研究の中間地点にあたり、研究成果を何かの形で公開する必要性を感じていた。そこで上記の4班で相談し、札幌においてシンポジウムを開催することとしたのである。テーマについては、歴史教育を取り上げたいという私の希望を採用していただいた。さらに、今回の計画に、活発に活動されている北海道高等学校日本史教育研究会・北海道高等学校世界史研究会にご協力いただけないかと、中村和之先生にご相談したのである。幸いなことに快くご了承いただだけ、共催の形でご参加いただくこととなった。

私も日常的に、講義・ゼミなどを通じて、歴史・文化史教育に携わっている。そして最近特に実感するのが、歴史意識・歴史観が希薄な学生が我々の世代よりも増えているという点である。教科書問題や靖国問題などで歴史認識が国際問題となっているにも関わらず、中国や韓国に対し「なぜそんな昔のことを」「ムカツクヨネ」といった反応をする学生が多い。また授業の中で気がつくのは、古代・中世、奈良・平安・鎌倉といった時代や順番さえおぼつかない学生が多いという点である。これでは基礎事項の説明なしでは授業内容が理解できないのは当然で、最近はその点に可能な

限り留意している。従来は、入試科目かどうかとも問題とされたが、私の勤務先ではそもそも一般入試を経て入学する学生は少数になりつつある。つまり、中学・高校の授業以外で歴史に触れる機会は著しく少なく、興味もないという学生が大半である。彼らに、どのように歴史を学ぶ重要性や面白さを伝えられるのかは、大学教育だけでは解決できない問題と感じていた。今回、立案の段階から両研究会の先生方と意見交換・討論できたことは、我々にも大きなチャンスであった。

シンポジウム第1セッションは、事前打ち合わせを何度か重ねる中で、我々の研究成果に加え、佐々木史郎氏、養島栄紀氏など関連研究者の方々にも加わっていただき、最近の北方史研究を概観できる構成をとった。我々の研究に限っていえば、まだ途中経過で消化しきれていない部分も多く、どの程度ご参考にしていただけたか心配である。第2セッションは日本史教育研究会・世界史研究会の先生方に内容を練っていただいた。サハリンを例に異なる立場からの歴史認識と歴史教育について述べた板橋氏の発表、北海道における北方史教育の可能性を述べていただいた吉嶺氏の発表、元寇を例に対外関係史について述べた長谷氏の発表は、歴史事象や歴史観をどのような意識で学生に伝えていくべきかを模索する上で、大変な示唆に富むものであった。研究の場においても意識すべき事項が少なからずあったと感じている。また、教育において我々の研究を活用する可能性を示していただけたことは大きな励みであった。さらに、教育行政の立場からの赤間氏のコメントも、教科書や歴史教育の体制・制度を改善していきたいと考える我々にとって、参考となる部分が多かった。もちろん、懇親会・討論で様々な方々からご質問・ご意見をいただけたことも重要であった。

シンポジウムを終えて感じるのは、今回のような試みをさらに継続していく必要性である。学校教育、社会教育、研究などの専門家が歴史教育にかかわるさまざまな課題に連携して取り組むことのできる環境の整備に今後も取り組んでいきたい。打ち合わせ中に生まれたものの、今回のシンポジウムでは取り上げることができなかったアイデアも多く、いずれその中で実現すべく努力したい。研究会の皆様方にも、続けてご協力をお願いする次第である。最後に、両研究会と我々を仲介していただいた中村和之先生には特にお礼を申し上げたい。

## シンポジウム報告

今井一吉 (札幌西高等学校)

平成17年度の夏の研究会は、札幌学院大学・臼杵勲先生のお誘いがあり、また初めて日本史研究会との共同で準備・運営に当たる形をとって、公開シンポジウムを行うこととなった。当日は全道の世界史・日本史に関わる先生方をはじめ、一般参加の方は勿論、大学関係では大阪、そして沖縄と非常に広範囲にわたって参加をいただいた。そういった意味でも、またシンポジウムの内容、大学・高校の連携(さらには中学校や地域)との連携といった面でも大きな成功を収めたと思う。今回、事務局としての立場から今回のシンポジウムについて記録を残すという大役を仰せつかった。事前準備や当日の運営の様子、個人的な感想など、思いつくままに書いていきたい。

最初、吉嶺事務局長からこのシンポジウムの話があったのは2004年の10月。聞いたときは(失礼ながら)これほどの規模になるとイメージできなかった。自分の中で世界史研30周年の記念シンポジウムの印象が強かったからかもしれない。また今回の「北東アジア(北方)史」が自分の専門外の分野だったことも、どの程度のシンポジウムになるかということが今ひとつ掴めなかった理由だと思う。

年が明けて2005年、春頃から次第に準備のための会合が増えてくる。初めて会場である札幌学院大学や臼杵先生の研究室にお邪魔したのもこの時期である。臼杵先生の研究室では、部屋の半分近くを占めているIT機器に目を奪われた。作業中の金代・シャイガ



城の復元CGを見せていただき、最先端の調査・研究手法の一端を垣間見ることができた。またシンポジウムの会場であるSGUホールを下見した際、非常に立派な設備でシンポジウムを開催できることに感動した反面、



これだけの会場に人を集めることができるのか不安になったことも思い出される。

8月の晴天に恵まれたシンポジウム当日、世界史研・日本史研双方の事務局長の意思疎通がしっかりしていたため、準備に関しては特に大きな混乱もなく進めることができた。

当日の参加者も高校の教員だけでなく、一般の方（道民カレッジ）の

参加もあって、まずまずの人数でスタートすることになった。当日の内容については、後日刊行される集録を見ていただきたい（山川出版社より、『北方世界の交流と変容【仮題】』として今年刊行予定）。私自身、記録のためカメラ片手に会場を歩き回っていたため、じっくり腰を落ち着けて各報告を聞くということができなかった。ただいつも研究会の時はそうなのだが、こういった第一線の研究をされている先生方のお話を聞くと、「教科書にはない歴史」がそこに存在することを改めて認識する。新鮮な空気を吹き込まれたような気持ちになる。そしてそれを、自らが授業の時に直接的・間接的に生徒に伝えていこうという気持ちにさせられる（今回は龍谷大学の村岡先生が、「モンゴル人第一主義はウソです」と断言されていたのが印象的だった）。

今回のシンポジウムが例年の研究会と異なるのは2日目の内容であった。1日目の報告、つまり北方史（北東アジア史）を、どのように高校教育に取り入れていくのかということを中心としたパネルディスカッションである。議論の中心は、通史が主体である現行の世界史・日本史教育の中で、特定の地域や時代を深く取り上げられるのか、取り上げるとするならば今回の報告のどの部分なのか、ということであった。しかし、パネラーでもあった吉嶺・長谷（日本史研事務局長／札幌星園高等学校教諭）両氏が報告された、「教科書にほとんど取り上げられない」「受験でもあまり



出題されることのない」北方史の現状が大きな"壁"になり、授業で取り上げることは難しいという意見がフロアーからも出ていた（中学校の先生からも発言があり、個人的には非常に参考になった）。

以下は私見だが、地歴公民の各科目は単なる暗記科目ではない、と私は思っている。確かに用語を覚える（暗記する）ことは必要であるが、それが第一の目的ではない。地歴公民の科目で一番に必要なのは想像（イメージ）できる力である。「受験に出ないからやるのは無駄」という意識は、実は受験勉強をする上でも大きな遠回りである。受験をする・しないに関わらず、ユーラシア大陸の地図が頭に浮かび、どこにどのような人々が活動（生活）していたのかということイメージできれば、世界史の理解は深まっていくし、歴史を学ぶことの面白さにつながっていくだろう。ただ用語を暗記するだけなら高校生の努力で可能である。我々教員は、覚える事項を提示することのみに終始するのではなく、生徒の想像力を駆り立てるさまざまなエッセンスを提供することが最も重要ではないだろうか。今回のシンポジウムでも、こういった各地域の歴史をパズルのピースのように組み合わせることが、世界史の大きな枠組みを捉える（イメージする）上で近道になるのでは、と改めて考えさせられた。

### ▼第37回大会予定

日 時 平成18年8月4日(金)

※来年度は日本史研究会・30周年記念シンポジウムが、8月2日(水)・3日(木)に開催される予定です。


会 場 未 定 (現在、調整中)

講 師 未 定

研究発表 未 定 (募集中)

---

@世界史研究会のホームページ@

→  北海道高等学校世界史研究会

<http://www2.snowman.ne.jp/~ennui/kouseiken/>

---

### ■編集後記■

会報第12号の発行となりました。会員の皆様のご協力に感謝申し上げます。

昨年の第36回の研究大会は、公開シンポジウムというかつてない規模のものとなりました。第一線で活躍されている研究者の方々と、私たち現場の教師を結び、なおかつ最新の研究成果と普段の授業との接点を模索する試みとして、非常に貴重な機会であったと個人的にも思いました。また改めて日頃の教材研究や研修に努めなければならないと反省も…。

最後になりましたが、いつものように編集作業が遅れ、関係の先生方にいろいろとご迷惑をおかけしましたこととお詫び致します。

(岩見沢東・中川雅史／札幌南陵・吉田 徹)